The Japanese Society for Quality Control

学会誌編集委員会委員長からのメッセージ

品質管理関係者に求められる戦略的連携

元・富士ゼロックス(株)
立林　和夫

昨年11月より学会誌編集委員長を担当しています.今回，同時に担当しているグローバル品質管理教育研究会(GQE)の副主査の立場で私見を述べます.

GQEの役割は，開発・生産拠点を海外に展開する日本企業における，現地従業員に対する品質管理教育の困難を調査し，対策を立案すると同時に実現までの道筋を答申することです.

日本製品の強みは新技術と高品質にあり，海外生産でも高品質を維持するうえで，海外拠点での品質管理教育が不可欠です．企業は，各社の努力のもとで現地拠点での品質管理教育を行っていますが，多くの困難を抱えていると報告しています.

どのような困難があるかをGQEで調査していくうちに，1企業の中では見えない問題点が，共通する困難を調べる中で見えてきました．以下の2点です.

(1) 各社は海外進出にあたり，かなりの準備を行っているにも拘わらず，多くの想定外の困難に直面している．各社は準備を行ううえで，当然自社内の経験を活かしているが，同一地区に進出していた他社の経験まで活かしているようには見えない．また，相談にあたる機関の存在も見えない.

(2) 各社は海外拠点での品質管理教育にかなりの費用と工数をかけているが，それでも十分に教育できていないと感じている．教育テキストの編集と翻訳，現地人講師あるいは通訳の育成，現地経営者を日本に呼んでの教育などに費用と工数がかかるが，企業1社の予算にはおのずと限界がある.

他社の経験を共有し，費用・工数の効率を日本企業全体で上げるには企業間の連携・協力が必要となりますが，企業関係者には日本国内で熾烈な競争を繰り広げている各社が連携・協力することは考えられないという声が多いのです．しかし，半導体や白物家電のように，韓国・中国メーカーほかに押されている製品分野があり，しかも，相手方は国を挙げた戦略的な動きをしているのです．こうした中で日本企業がバラバラで孤立無援な戦いを続けるのでは，とうてい勝ち目はありません.

かつて，日本の品質管理の先輩諸氏は，戦後復興期・高度成長期・日本企業の発展期に，品質管理の普及と実践のために，産学官＋教育機関の戦略的連携を模索し実現させてきました．そして，そうした先輩諸氏の活躍が日本経済の発展を正面から支えたことを後輩である我々は知っています．その後輩たちが戦略的な動きができないばかりか，戦略的な発想もできないということはないと私は考えます.

PDCAは品質管理の基本ですが，こと海外拠点での品質管理教育については，1社の中でのPDCAにとどまり，企業を跨ぐPDCAにはなっていないようです．古くからある諺(ことわざ)・慣用句・四字熟語がどんどん死語化している現在，PDCAに通じる「温故知新」(先輩諸氏の活動を知り現在に活かす)という語も死語化しているとは考えたくもありません.

海外拠点での品質管理教育にかぎらず，品質管理関係者は，先輩諸氏がとってきた国を挙げての戦略的連携の必要性を再度認識し，引き継ぐ意思と意欲を示すときが来ていると感じています.

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

なお，次号の「特集記事」はグローバル品質管理教育研究会の報告を予定しています．どうぞ，ご期待ください.

NII-Electronic Library Service